

八十二歳、小児科へゆく

同い歳の僕ら夫婦が揃ってやってきたのは、こぢんまりとした多摩の診療所「石川小児クリニック」。

小児科だが、内科も兼ねインフルエンザ予防接種の指定医となっている。

午前中の診療時間がやや過ぎてしまつて窓口が閉じようとしていたところを、受付が先生の許可を得てくれたようだ。待合室は、既になのか元々通院者が少ないのか、誰も居ない。

インフルエンザ予防接種の問診票の書き込みが済んで、二人揃って入室。

まず、僕が先生の前に座つた。背が丸まつて小柄な恰好は僕らとそうは違わない歳に見えた。妻は直ぐ後ろに腰かけている。

優しい声でおもむろに、

「熱を測りましょう」「三六度四分ですね」、アーンと言われなかつたと思うが口を開けて喉を見せ、「インフルエンザの予防注射は受けたことありますか？」後ろの妻に「去年は受けました？おとしは受けているね」と僕、「コロナは？」「罹つてません」……

とにかく優しい。

僕がいつも通院する「かかりつけ医」とはまるで違う。いつもは紛れもない「年寄り」だが、ここではまるで幼児になってしまふそうだ。

こうして、優しくのんびりとしたやり取りが過ぎ、インフルエンザの皮下注射を済ませて退室。院内のベンチで妻を待った。

程なくして妻が戻って来るや、笑いながら先生とのやりとりを話す。

「熱を測りましょう」「三六度四分ですね、ああ仲良く」、妻が事前の間診票に書いた生年月日を見て、「ああ、同級生?」、妻「同じ学年です」

皮下注射を済ませたところで妻「診療時間を超えてしまつて済みませんでした」と謝辞して退席する時、

「ころばないようにね」と注意を促しながら、「よろこぶのは良いけど」などと冗談ともつかないギャグのような気遣いを、か細い声で付け足してくれたそうだ。思わず、ほっこりしたという。

先生は先生で、日頃泣き騒ぐ子供の患者に接しているせいなのだろう、今日の患者の（自分で言うのも何だが）大人しく慎ましい態度に接して、すっかり気分が軽快で優しくなってしまったに違いない。

帰り際に、受付のインフルエンザ受付記載に気が付いた。

見ると、接種申し込み欄には既然大勢の記名があった。来院患者が少ないのではないかと心配したが、杞憂だったんだ。

「永山駅に隣接した便利な立地のここで、流行らない医者なんて無いよね」。

すると妻、「ここを、かかりつけ医にしようかな」